

# 紀 要

## 第 8 号

---

### 目 次

#### 序

- 近江へのアプローチ・その2 神崎郡篇…………… (近江歴史クラブ)
1. 愛知川左岸域の開発と水利…………… (佐野 静代)
  2. 後期古墳…………… (細川 修平)
  3. 丸山1号墳出土土師質陶棺について…………… (中村 智孝)
  4. 古墳時代の鍛冶工房…………… (大道 和人)
  5. 古代の集落…………… (畑中 英二)
  6. 建物遺構…………… (神保 忠宏)
  7. 古代寺院—軒丸瓦の文様から—…………… (重岡 卓)
  8. 郷 (里)…………… (内田 保之)
- まとめにかえて……………
- 日本古代国家形成史論に関する諸前提
- 研究ノートあるいは覚書その1—…………… (芝池 信幸)
- 春日山古墳群分布調査報告… (岩橋隆浩・大崎康文・工藤基志・高橋あかね)
- 6世紀代における木棺直葬墳の副葬・供献について
- 葬送習俗としての「主体部内容器埋納」にみる  
「畿内型横穴式石室」との関係を中心に—…………… (畑中 英二)
- 高島郡における製鉄の問題から—6世紀を考えるための序章— (細川 修平)
- 湖南地域の異方位地割と古代の建物方位…………… (田井中洋介)
- 木炭窯の形態からみた古代鉄生産の系譜と展開に関する予察
- 滋賀県瀬田丘陵の事例を中心に—…………… (大道 和人)
- 赤野井湾遺跡出土の鋤…………… (阿刀 弘史)
- 

1995. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

# 高島郡における製鉄の問題から

## — 6世紀を考えるための序章 —

細川修平

古代高島郡においてどの段階から製鉄が実施されていたかについては、古代史全体の課題である。奈良時代に藤原氏の「賜ふ」ところとなる高島の鉄穴の実態であり、またその経緯から考えられる特殊性の実態こそが、古代の特殊技術の掌握方法に他ならないと考えられるからである。

この課題に最初に注目したのは森浩一氏を中心とするグループである。生産遺跡という当時はあまり顧みられなかった遺跡を精力的に調査する一つとして、北牧野製鉄遺跡の発掘調査を行い、奈良時代に遡る製鉄炉の存在を確認するとともに、製鉄遺跡群と後期群集墳の密接な関係を認め、古墳時代後期にまで製鉄の開始が遡る可能性が高いものと推定されている。その後、製鉄遺跡や後期群集墳の追加確認の調査が実施されることはなかったが、この推定は半ば定説として扱われるところとなり、7世紀前半には製鉄を実施している木之本町古橋遺跡の調査例や5世紀後半とされる今津町甲塚古墳から鉄滓が採集されたと言う報告例などが、この推定を補強している。

かく言う筆者もこの推定については、現時点においては否定すべき必要は認められないと考えている。さらにこの仮説を積極的に評価し、マキノ町における他の遺跡の状況から、間接的にこの推定を補強するとともに、そこから見えてくる特殊技術掌握の実態について問題点を探って見たいと考えるものである。そうした意味で小考は根拠の薄い推論となっているかもしれない。しかし、6世紀の政治状況の整理を行いたいとする筆者の思考過程では避けて通れない問題であった。序章とした理由である。そうした視点からのご批判を期待している。

### 1. 薬師堂遺跡について

マキノ町において発掘調査が実施された唯一の古墳時代の遺跡が薬師堂遺跡である。知内川右岸に発達する複合扇状地上に位置する、古墳時代から平安時代にかけての遺跡である。過去2度の発掘調査で検出された建物遺構は全て掘立柱建物で、それらが6世紀から11世紀にかけて構築されたものと考えられている。1次調査では10棟の建物が検出され、大きく6世紀と11世紀に分けられている。この年代比定の方法には俄かに同意し難い部分もあるが、2次調査の結果も踏まえば、6世紀代から掘立柱建物による集落が形成されていたと言う結論は穏当なものと考えられる。

すなわち、2次調査で検出した建物のうち明らかに8～9世紀と考えられるものはほぼ磁北方向に軸を合わせている。これは1次調査の建物1および8もこの段階に該当する可能性を示している。次に、2次調査においては9世紀以降の遺物は全く出土しておらず、そこで検出された他の2棟の建物については、8世紀以前特に細片ながらも遺物の確認できる6世紀を中心とする年代で考えざるを得ない事実が存在する。そして、その2棟の建物の軸方向は1次調査で検出

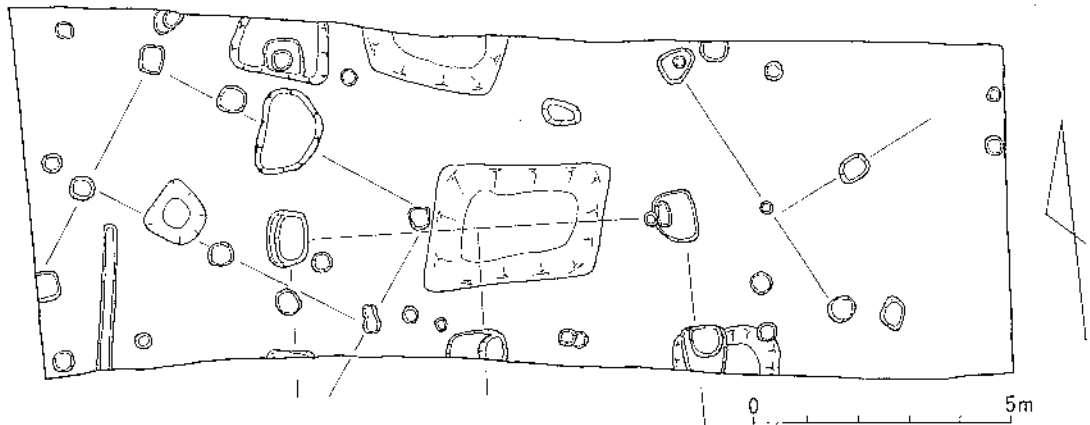
された多くの建物に近いもので、それぞれの方向とその微妙な差異については扇状地の傾斜との関連で理解できるものである。すなわち、1次調査で検出された建物の幾つかが6世紀代にまで遡る可能性は高いものとなる。さらに、10世紀以降の建物においても地形に沿った方向で、6世紀の建物と10世紀以降の建物が同一の主軸方向を取る必然性が認められるのである。以上、1次調査での建物の全てを6世紀代に比定することはともかく、例えば比較的大型の掘方を持つ建物5などについては6世紀代に比定する妥当性は認められ、いずれにしろ、2次調査の建物を含めれば6世紀代の掘立柱建物の存在は確実と言い得るのである。

このように薬師堂遺跡において6世紀代の掘立柱建物が認められるとすれば、これは県下における特異な現象と理解されねばならない。大津市北郊の遺跡群や草津・栗東の建物群においては5世紀後半から掘立柱建物が散見できるが、これは渡来系氏族の関連とともに、全体として畿内と歩調を合わせる社会の動きの中で理解されるものである。その他の地域では、能登川町斗西遺跡で掘立柱建物が確認されている。伝統的な流通の結節点としての先進性によるものと考えられる。その他では7世紀代の豪族居館と考えられる八日市市建部日吉遺跡や新旭町美園遺跡が例外的に掘立柱建物を営む程度で、ほとんどの場合8世紀代まで竪穴住居が主流となっている。すなわち、薬師堂遺跡は県下において極めて早い段階に掘立柱建物を採用したもので、その性格については一般集落とは異なるものと考えなくてはならないのである。特に1次調査の報告で指摘されている6世紀代の建物群を妥当なものとするなら、その規格性は豪族居館に近いものである。その当否はともかく、一定以上の階層的立場にある集落でなければ掘立柱建物が採用できなかったであろう事実については認めざるを得ないのである。

最後に集落分布について述べておきたい。マキノ町ではほとんど発掘調査がなされておらず確実なことは言えないが、弥生時代や古墳時代の集落はほとんど確認されていない。複合扇状地が発達する地理的条件からすれば、この傾向は今後も大きく変更されることはないであろう。この場合、薬師堂遺跡はマキノ町における弥生時代以降の最初の本格的集落遺跡と理解することが可能であり、地域の発展の中から薬師堂遺跡の建物が成立してきたものとは考えがたいのである。言い換えれば、一定の階層的な関係を内包した集団が何らかの意図を持って、マキノの地に来て来た結果であると理解すべき状況にある。薬師堂遺跡の特殊性の最大の評価である。

## 2. 西牧野古墳群について

西牧野古墳群は46基から構成される後期群集墳である。マキノ町には他に96基から構成される北牧野古墳群をはじめ、3群の後期群集墳が存在する。古墳の数は破壊されたものが多いことからさらに増加するものと考えられている。こうした群集墳の形成は、薬師堂遺跡に見た一定の階層的關係を内包した集団の存在と密接にかかわるものと考えられる。一方、南接する今津町内においては所謂「後期群集墳」がほとんど存在しない事実が存在する。北牧野古墳群の96基以上という構成数は、地域の群集墳としては極めて多いものであり、薬師堂遺跡がいかに有力な集落であっても単一の集落に対応するものとは考え難い。西牧野古墳群の46基を含めて広い範囲からの「帰葬」が想定できる所以である。すなわち、薬師堂遺跡などのマキノの遺跡が群集墳形成の基礎になるとともに、今津などの旧来の集団の一部もその形成にかかわった可能性が高いのである。



第1図 マキノ町薬師堂遺跡2次調査遺構図

新しい集団の形成とともに旧来の集団が編成されたと考えられるのである。

さて、後期群集墳の墓域がどのように決定されるかは不明であるが、マキノ町における新たな集団の定着を含め、後期群集墳の墓域もマキノの地に求められた事実は、マキノ町方面に社会的視点が急激に向かっていた事実を示す。マキノ町の平野部は複合扇状地と低湿地から構成される。これは弥生時代以来の初期開発が極めて困難な所であり、弥生時代、古墳時代の集落の少なさもここに起因する。それはともかく、こうした開発困難地へアプローチは早い場合で6世紀後半、多くは7世紀以降に求められるようであり、マキノの場合はその早い段階の例と理解できる。なお、この段階の開発が必ずしも耕地開発のみを意味するものではない点は言うまでもない。

ところで、マキノ町は高島郡でも屈指の後期古墳の分布遅地帯として認識されるものの、内部主体の構造が把握されるものは唯一斎頼塚古墳（西牧野1号墳）が存在するのみである。この、斎頼塚古墳は西牧野古墳群に含まれるが、他の古墳が谷から谷斜面に立地するのにに対し古墳群の中央に伸びる尾根上に立地し隔絶性を示す存在である。同時にマキノ町内の他のほとんどの古墳が20m以下の規模であるのに対し、斎頼塚古墳は20mを越える規模で、西牧野古墳郡内での隔絶性を表示するのみか、町内の他の古墳に対しても上位に位置する存在である。いわゆる大岩山古墳群に見るような階層的関係を明示するタイプの古墳群ではないが、全く等質的な群集墳の在り方ではなく、階層的な関係を内包した集団による群集墳の造営であり、これは薬師堂遺跡で見た集落遺跡の階層的な関係と対応しているとも考えられる。

こうした斎頼塚古墳の横穴式石室であるが、全長7.2m、玄室長4.1m同幅2.0mの右片袖石室で、その最大の特徴は玄室奥部に石棚を架構している点である。石棚は奥壁と右側壁に架構し、石室自体も所謂典型的な畿内型を示すもので、紀伊型と言われる石棚を持つ典型的な横穴式石室とは趣を異にする。しかし、位置や高さから判断する限りまさに棚としての機能が与えられたものであり、石屋形や棺台とは区別される。すなわち、形態的な差異は存在するものの、機能的には紀伊型の石室と理解すべきものであり、棚を用いて行われたであろう「祭祀」などにおいて紀伊との関係を表出したものと考えて大過ないものである。

さて、紀伊型の横穴式石室については河上邦彦氏の研究が存在する。氏の研究によれば、紀氏を中心とする関連の諸豪族が紀伊型の石室を構築したものとされる。そして氏の研究に依存するならば、斎頼塚古墳についても石柵という機能から、文献などからは知られることのない紀氏と何らかの関係のある被葬者像を想定することが可能となるかもしれない。

ところで、岩橋千塚においても石柵は全体の8.4%にすぎないという事実に注目するならば、氏族の構成員の全てが石柵を使用できたものではなく、氏族の中心人物を含むごく限られた人格にのみ石柵が使用されたものと考えられる。紀伊型石室は紀氏およびその同族の有力者層の墓制であったのである。この場合斎頼塚古墳が西牧野古墳群における盟主墳であり、しかも付近における最大級の古墳である事実と関連する。ここにおいても造墓集団の有力者が石柵を使用したものであり、紀伊などにおける在り方と共通するのである。

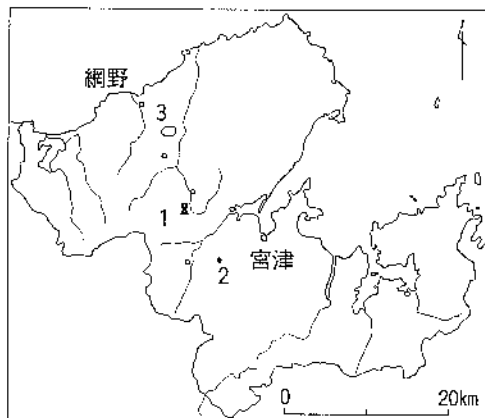
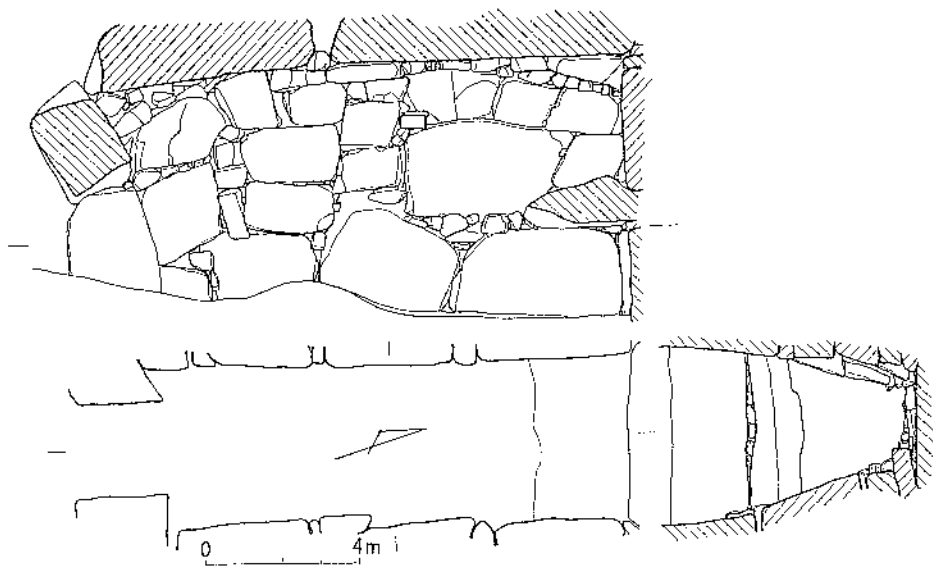
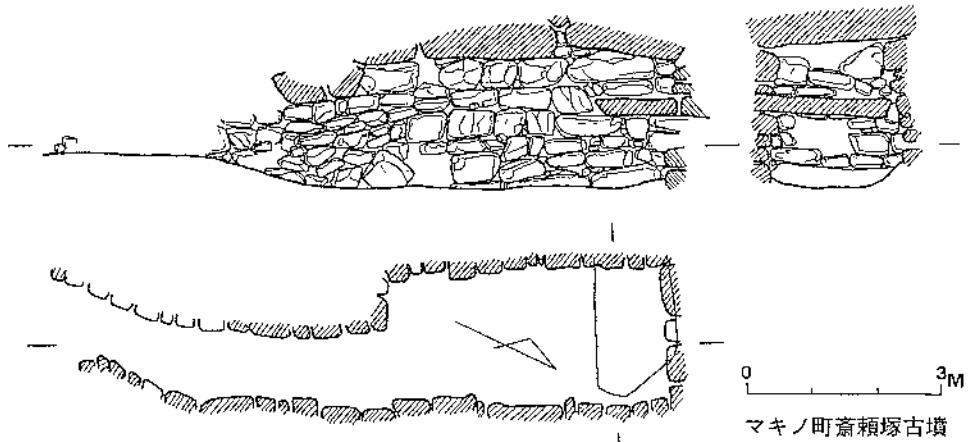
以上、斎頼塚古墳を中心に西牧野古墳群について考えてみた。ここでは、一定の階層的な関係を内包しつつ、新しい集団と旧来の集団とが編成されつつ後期群集墳が造営されている事実、その関係の中心に斎頼塚古墳が位置する事実、そしてその石室構造からその被葬者が紀氏と何らかの関係を持っていたであろう可能性が考えられたのである。

### 3. 角山君氏について

角山君氏はマキノ町に南接する今津町付近に勢力を持った古代氏族で、高島郡の郡領氏族であるとともに、奈良時代の高島郡における製鉄に深く関与した可能性が考えられている。特に角山君家足は、藤原仲麿呂乱時に藤原氏との密接な関係を示しており、藤原氏が賜った高島の鉄穴の管理者としての立場が想定されるのである。

さて、この角山君氏については西田弘氏の研究が存在する。氏が明確に述べられている様に、角山君氏は古事記考昭天皇記にみえる都怒臣氏系の系譜であり、同記にみる春日臣氏や近淡海国造氏など所謂「ワニ」系の近江特に湖西地域と関連の深い諸氏族との並びで理解するべき存在である。また、その本願地は角川＝現石田川流域に求めるべきで、高島郡衙を含む可能性の指摘されている日置前遺跡は角山君氏との関連で理解すべきものである点も説明の必要がないであろう。そして、角山君氏が早い段階から鉄器生産に関係していたであろう可能性は、甲塚古墳で採集されている鉄滓（5世紀後半）や妙見山C-38号墳（4世紀初頭）からも鉄滓が出土している報告例から想定されるところである。これらの鉄器生産がどの段階から製鉄を含むものとなるかは明らかではないが、極めて注目すべき事実関係である点は説明の必要もないであろう。

ところで、こうした角山君氏については今一つ注目すべき伝承が存在する。西田氏が否定されたところの建内宿禰系氏族としての角山君氏の伝承である。すなわち建内宿禰の子木角宿禰を祖先とするもので、これは紀氏同族としての角山君氏を説明している。津野神社社伝等に見られるもので、基本的には「ツノ」という共通する特殊な名称による混同である可能性は高いものである。しかし、この伝承が何時成立したかは明らかでないが、同社が元禄年間には紀氏系の掘田撰津守（堅田藩主）の崇敬を受けていることから、江戸時代初期までには同社が建内宿禰系の神社であったと認識される状況が成立していた点は確かである。そして一般に神道の整理統合が江戸時代中期ころから盛んになることを考え併せれば、この角山君＝津野神社＝建内宿禰系＝紀氏同



- 1 新戸古墳
- 2 高浪古墳
- 3 遠所遺跡

第2図 石棚のある横穴式石室と新戸古墳の位置

族という認識は比較的早い段階から存在していた可能性も考えられるのである。

ここで注目されるのが、先に見た斎頼塚古墳の横穴式石室である。これは紀氏に関連する横穴式石室で、古墳時代後期の集団関係の編成時にこの紀氏に係る横穴式石室を造営した人格がその中心に位置した事実を示すものである。従って、角山君氏そのものは「ワニ」系氏族であるとしても、その氏族の形成段階に紀氏と密接に関係する歴史的事実が存在し、それを基礎として建内宿禰系氏族としての伝承が成立したと考えることは決して根拠の乏しい方法であるとは言い難いのである。敢えて言えば、斎頼塚古墳に見られるように、紀氏関連氏族によって6世紀代の氏族編成を受けた事実が「ツノ」と言う特殊な氏族名の所以になっている可能性も考えられる。すなわち、6世紀代に紀氏に関連しつつ集団が編成された結果として8世紀に存在するのが角山君氏であり、前段階の記憶が建内宿禰系氏族としての伝承として残されたのである。そして、8世紀の角山君氏が高島の鉄穴の経営とかかわっていたとするなら、6世紀代の氏族の編成がその鉄を巡る編成であった可能性が高いと判断されるのである。さらに述べておこなら、「ワニ」系氏族としての角山君氏の伝承は6世紀以前のさらに古い段階の記憶によるものと考えている。いずれにしろ、集団関係としての氏族関係とは、歴史的に幾度も編成を受けて成立変化するものである。ある段階のその集団の名称や系譜が判明するとしても、それを他の段階に援用する方法は明らかに危険を伴うのである。

#### 4. 古墳時代の製鉄の中で

以上ここまで述べて来たことを整理してみれば、6世紀のある段階にマキノ町付近が新たな開発の対象として社会の視線を集めるところとなる。その開発は、内部に階層的関係を有した新たな集団の薬師堂遺跡への居住が中心となって実施されたが、旧来から今津町付近に居住していた氏族の編成を伴うものであった可能性が考えられる。その新たな集団とは古墳時代段階には紀氏と関連しつつ集団の編成がなされた可能性が高い。8世紀段階に高島鉄穴の管理を行っていたとされる角山君氏は「ワニ」系氏族であるが、古墳時代の紀氏との関連が伝承等に色濃く残されている。従って6世紀段階の集団の編成が、角山君氏の前身としての鉄穴の経営と結びつく可能性が考えられる。

以上が現時点で判明している、あるいは推定が許される範囲のマキノ町を中心とする高島郡の古代の状況である。これは、鉄穴の問題を除くとしても6世紀以降のマキノ町が特殊な状況に置かれていた事実を示すものであり、この特殊性の根源には、やはり製鉄の存在を考えざるを得ないというのが偽らざるところである。すなわち、状況証拠のみではあるが、6世紀代に紀氏との関連をしめす集団がマキノの開発を実施した目的は、高島における製鉄の開始であったと考えられるべきであろう。以下、6世紀代にマキノを中心とする北近江において製鉄が行われていたとして問題点を探ってみたい。

6世紀代に遡る製鉄遺跡については、北部九州、吉備地域とともに最近可能性が強いものとして注目を集めているのが丹後地域である。弥栄町遠所遺跡はその製鉄の開始については依然流動的要素も存在するようであるが、少なくとも7世紀前半には製鉄を行っている事実が確認されており、畿内に最も近い製鉄遺跡群として注目される場所である。さて、この遠所遺跡の周辺に

においては後期古墳がむしろ発達していない状況にあるが、その中であって同じ竹野川流域の大宮町新戸古墳は注目すべき存在である。丹後唯一の後期の前方後円墳であり、当時の丹後を代表する首長の一人が被葬者であったと考えられる。横穴式石室の形態から見る限り10期でもその後半7世紀に近い段階の造営が考えられる前方後円墳である。そして問題となるのがこの新戸古墳の横穴式石室には石柵が存在する事実である。また、同じ丹後の野田川流域の野田川町高浪古墳は普通規模の後期古墳であるが、そこにおいても変形した石柵の存在が確認されている。すなわち初期の製鉄地域の一つである丹後における首長層の一部は紀氏との関連を想定することが可能であり、しかもその紀氏との関連は一般の後期古墳の被葬者の中にも展開しているのである。

初期製鉄を行う丹後地域において紀氏が関係した状況と、同じ段階に製鉄を実施しているとも考えられるマキノ町において紀氏が関係した状況は、果たして偶然と言いえるものであるだろうか。紀氏は言うまでもなく初期の畿内政権を支えた有力氏族の一つであり、卓越した造船技術を背景に紀ノ川から瀬戸内四国航路を経て朝鮮半島への航路の掌握に活躍した氏族である。まさに倭五王の時代であり、日本にとっても半島での利権の獲得が大きな目標とされた時代である。そうした状況の中で半島における將軍伝承を持つなど当時の一級氏族で、その果たした役割は計り知れないものが存在する。また、そうした活躍の結果として大谷古墳や車駕越古墳の副葬品が示すように渡来系文物と深い関わりを持ち、また文献からは韓鍛冶部氏との関係が知られるように、一定の渡来系技術集団をその配下に加えていたものと推定されるのである。マキノの製鉄に漢人系の渡来人が関与していたであろう事実は、マキノ町上開田の称念寺薬師如来像の墨書（延久元年）から推定される所であり、彼らこそがこうした紀氏の配下に置かれた渡来系製鉄技術集団であったという図式は容易に想定されるのである。そしてこれは丹後における紀氏の位置づけにもそのまま当てはまると考えられるであろう。すなわち、丹後とマキノにおいて確認できる紀氏との関連は、それぞれの地で行われた製鉄に関連するものであり、外交や戦乱によって紀氏が獲得しあるいは保護した渡来系製鉄技術者集団が、それぞれの地において製鉄を行った結果の表出であると理解されるのである。もう一つの初期製鉄地域である吉備も、瀬戸内航路を媒介として半島との交渉に活躍した吉備氏の本拠地である点は、当時の技術者の確保の方法を考える上で極めて示唆的であると言い得るだろう。

では、紀氏との関連で開始された丹後や北近江における製鉄は、そのまま紀氏の独自性の中で達成されたものと言えるだろうか。丹後も北近江も角山君氏の伝承を除けば、明確な紀氏との関連を示す文献は全く知られていない地域である。文献に氏族名が残ること自体が奇跡的な現象であり、これを評価することはできないが、文献に名を残さない点は本格的に紀氏がこの地に居住したものではない事実の現れと評価することも不可能ではないだろう。また、斎頼塚古墳や新戸古墳の石柵は紀伊型石室の典型から大きく離れた存在である。石柵を用いた祭祀等の必要はあったがそれを構築するための石工集団までは存在しなかった事実を示し、言い換えれば、一定以上の集団としての紀氏の居住地ではなかった可能性を示している。従って、丹後や北近江での製鉄は紀氏の独自の勢力として開始したとは考え難く、そこには第3の権力として畿内政権の関与を想定せざるを得ないのである。



その関与の具体像こそ明らかにせねばならない課題ではあるが、現時点ではまだ不明な点が多すぎるのが現状である。ただし、紀氏は畿内政権を構成する有力氏族の一つであり、その配下に位置する技術者集団はその私有民である。今、その有力氏族の私有民を要所に配し、その活動を補償するという方式が畿内政権の関与の現れとするならば、それは豪族私有民の公認に他ならず、豪族連合としての政権の枠から脱しきれていない状況を読みとらざるを得ないのである。しかし、畿内周辺の製鉄が紀氏に係わるとしても、その本拠地から遠く離れた場所で、しかも丹後と北近江との2ヶ所に分かれて行われているという事実は、畿内政権が私有民の活動を一定限まで掌握している証であり、そこに強制的な移住などを考えるならば私有民の公民化とでも言うべき政策が想定できる。また、その集団が一定の階層的関係を内包し、しかも農業生産の多くが臨めない地に規模の大きい集団として維持しているのである。単に私有民の公民化ではなく私有民の組織としての掌握であり、同時にその私有民の活動を保証する。当然その活動によって畿内政権としても生産性が向上するという図式が考えられるのである。しかも、製鉄によって紀氏が必要以上に勢力を伸ばすことも制限しているのである。豪族の私有民を認めその活動を保証する反面、その活動を掌握する。漠然とした内容ではあるが、当時の畿内政権の内容の到達点と限界点とが如実に現れているのではないだろうか。当時の政策の一つが「部民制」と言われている。大土家を含めた諸豪族の私有民にかかる政策と理解できる。そして上で述べた紀氏との関係で展開した製鉄のモデルこそ、この「部民制」の一つの現れとするのも一つの方法ではないだろうか。また、この集団を維持するために、旧来の集団、具体的には今津の諸集団が編成されたとするならば、この今津の地は文献史学の指摘する「ミヤケ」の実態に近いものとも考えられるのである。従って、この可能性に立脚するならば北近江や丹後の製鉄は畿内政権による部民や屯倉の設置であり、その基礎となる必然性の中に紀氏が位置したのである。そして、文献などでは紀氏側の側面がほとんど残されなかった点は、製鉄という当時の最重要産業にかかる部分であるがゆえに畿内政権の管理がより強固に行われたからとも考えられるのである。

以上、繁雑な文章となったが、6世紀段階においてマキノで製鉄が行われた。それは、紀氏との関連によって編成された一定の階層的関係を内包する集団の手によるものであるが、紀氏の直接的な関与ではなく、畿内政権による部民あるいは屯倉の設置という方法であった。製鉄という重要な産業ゆえの特殊性も考慮しなければならないが、当時大陸から流入する新しい技術の1次的な受け皿は、紀氏などと呼ばれる有力豪族層に負わざるを得ないものであったからと考えられる。それを部民として旧来の集団の中に編成し、同時に屯倉の設置を行うことにより、各地における各種の生産力の向上とその掌握を計ることが、畿内政権の大きな課題であった。今回はマキノにおける製鉄を媒介とした、この課題に対する一つのモデルを提示したものである。このモデルが他の地域の他の生産関係においても適応されるものか、また、その具体像は如何なるものであったか、まだまだ残された課題は多い。例えば、6世紀代の主要製鉄地域の一つは吉備であり、そこは吉備氏という巨大氏族が支配する地であった。畿内政権はそこには「屯倉」を設置し、吉備氏の製鉄に何らかの規制を加えようとした動向も、畿内政権の上の政策と軌を一にするものと考えられる。そして、その「屯倉」には当時最大の氏族である蘇我稲目が関与した事実が知ら

れている。畿内政権の規制の表現であり、これがマキノの地で見つかった紀氏の関わりとどの様に差異があるのかなど、まだまだ課題が多い。序章たる理由であり、こうした視点からのご教示をお願いしたい。

末筆ながら小論を記すにあたっては、畑中英二君と大道和人君から事実関係から事実の解釈に至るまで大いに教えられた点が多い。夜遅くまで、時には急ぐ調査の手を止めてまでの識論に付き合ってくれた畏友二人に感謝。

#### 註

- (1) 森 浩一ほか「若狭・近江・讃岐・阿波における古代生産遺跡の調査」（同志社大学文学部文化学科 1971年）
- (2) 吉谷芳幸ほか「薬師堂遺跡発掘調査報告書」（マキノ町教育委員会・財滋賀県文化財保護協会 1985年）
- (3) 1991年度マキノ町教育委員会が調査。筆者は調査指導として参加した。
- (4) 河上邦彦「石棚を有する古墳について」（『平群・三里古墳』奈良県教育委員会 1977年）
- (5) 西田 弘「角山君について」（『滋賀考古学論叢』第5集 1992年）
- (6) 増田孝彦「丹後の古代鉄生産」（『京都府埋蔵文化財論集』第2集 1991年）
- (7) 佐藤晃一「丹後地域」（『前方後円墳集成 近畿編』 1993年）

マキノ近辺の石棚付石室については若狭および敦賀地域が注目され、一つの分布圏を形成している可能性も考えられる。しかし、若狭においてもこの石室は「イレギュラー」的であり、この分布には何らかの意図を考えるべきと考える。従って、小論では分布圏としての評価は下していない。この点については別稿を用意するつもりである。

## 編集後記

昨夏は、暑い暑い日々が続きに続き、琵琶湖の水位は史上最低値を更新し続けました。その結果、湖岸のここかしこでは普段は日にすることの出来ない湖底遺跡の一面が姿を現わすことになりました。そして、明けて1月17日午前5時46分の悪夢の始まり。大自然の営為の前で、人間の無力を感じ続けた一年でした。被災者の方々には、衷心よりお見舞い申し上げます。さて、本号も多くの論考を掲載することが出来ました。つきましては、多くの方々からのご叱正とご指導を賜れば幸いです。

平成7年3月

### 紀 要 第 8 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
大津市瀬田南大萱町1732-2  
Tel (0775) 48-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社  
大津市札の辻4-20  
Tel (0775) 23-2580 Fax (0775) 24-6668